

どもる子どもの「生きるかたち」を支えるために

国立特別支援教育総合研究所 牧野泰美

1. 1日目の議論を受けて

- ・子どもにとっての担当者のありよう（担当者は子どもにとってどんな相手か？）
ありのままでいられる相手、黙っていてもいい相手、自分が出せる相手、話してもいい相手、話したい相手、ホッとできる相手、元気が出る相手、安心して一緒にいられる相手、前向きな気分になれる相手・・・
- ・担当者の子ども観、吃音観、教育観、価値観、世界観・・・
- ・どんな子どもに育ててほしいか
- ・それはどうしてか
- ・対話すること、考えること
- ・対象化すること
- ・関係性
- ・その子どもなりの吃音観
- ・吃音のある自分とのつきあい方
- ・先の見えなさ、不透明さ、簡単には解決しない問題と、なんとかつき合っていく力
- ・仲間の存在
- ・保護者の不安、子どもの不安
- ・吃音のこと、周囲との関係、生活上のこと
- ・子ども自身の問題、大人（保護者）の目から見た問題
- ・やっかいかもしれないけれど、決して悪いことではない
- ・楽な捉え方を見つける
- ・安心してどもることができる家庭
- ・よい聞き手、聞こうとする姿勢

2. 学習指導要領における「主体的・対話的で、深い学び」

※小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編，及び中学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編より 下線は筆者による

- ・「質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすること」が求められている

【主体的な学び】

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているかという視点

【対話的な学び】

子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているかという視点

【深い学び】

習得・活用・探求という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているかという視点

3. 対話をめぐって

- ・どんな関わりも、どんな臨床も、「対話」は柱である
- ・「対話」を通して、自己を発見できる
- ・「対話」を通して、吃音を、自己を、吃音のある自分（どもの自分）を対象化できる
- ・吃音のある自分と向き合うこと、自己との「対話」をすること、対象化すること
- ・「対話」を通して、課題が引き出される、整理される
- ・「対話」の材料、「対話」の形は、様々にある
- ・「自・他」と「自・我」、「内なる他者」

4. 子どもと対話する、関わるうえで

- ・本人の思い、考え、背景、出どころ
- ・じっくり聞く、じっくり話し合うこと
- ・一緒に考えること
- ・一緒に考えたり、学んだりするパートナー
- ・考える視点の提供
- ・吃音、吃音のある自分（どもの自分）と向き合う
- ・向き合い方を見つけるのは本人
- ・吃音のある自分（どもの自分）を見つめ、そのような自分がどうやって過ごすか、どう存在していくか、どう生きていくかを考える。あるいは、考えていくための手がかりを見つける。
- ・そのための実践は、多様な姿・形があり得る
- ・その実践の姿・形、子どもとの関わりのありようを、担当者は常に考える必要がある。ある意味、それを考えるのが仕事である
- ・子ども自身が、吃音のある自分（どもの自分）が生きていくために、自分が何を学んでいくとよいかを考える。担当者はそれを支える
- ・これらの仕事は、まさに教育の本質でもある
- ・担当者の吃音観、世界観が問われる。子どもは担当者のまなざし（担当者の吃音観、世界観）を通して、自分を見つめることになる

5. 吃音臨床と関係論

○関係論的な立場から、吃音のある子ども（人）との臨床を考えてみると・・・

「自らも生き生きと生きたいと願っている人としての臨床家（担当者）が、吃音があることで悩む子ども（人）を取り巻いている人間関係、事物・事象との関係に参加し、その中に生きる人間間の共感性（関係性）と、各々の自己性を育てるために関与する」こと

6. 「暮らし」という視点

- ・日々の暮らしの中での子どもの思いは？
- ・もしかしたら大人の目から見た子どもの問題？

- ・吃音の問題は「いつでもどこでも」ではなく、暮らしの中での、その場、その人、との関係の中で生じている
- ・子どもの、場や人や自己の認識によって影響される
- ・大丈夫な場、人を増やす
- ・今ある力、手持ちの力
 - 人は、いつも、今持っている力、手持ちの力で生きるほかない
 - 明日身に付く力を、今つかうことはできない
 - 今は、今の力で、今の自分のしゃべりでなんとかやっていくしかない
- ・肯定的に受け止められる実感
 - 吃音のある子ども（人）が手持ちの力をつかい、今の暮らしの中で自分らしさを肯定的に受け止められる実感を味わえる時間を蓄積する。子どもと教師等の間のこのような関わりの積み重ねが、子どもが周囲の中で（周囲や自分と折り合いながら）生きていく力になる
- ・自己有能感と自己肯定感
- ・役立つ、喜ばれる
- ・自己決定、主体性
- ・吃音理解
- ・自己認識、自己理解
- ・自分研究、生き方研究
- ・仲間の存在、モデルの存在
- ・回復力、立ち直る力、レジリエンス

7. 「自分」の再構築

- ・「自分」の成り立ちを振り返ってみる
- ・「自分」はどうやって意味づけされてきたのか
- ・「自分」の声、ことばは、どうやって意味づけされてきたのか
- ・育ちの中で意味づけ、形成されてきた「自分」
- ・関係性と自己性の再構築
- ・がんばりどころと、そうでないところ
- ・「ねばならない」ことはない／「ねばならない」からの解放
- ・発想の転換／そんな手もあったのか
- ・「今」も人生の本番

8. 吃音を語る

- ・暮らしを語る
- ・日常場面の対策（音読の時、日直の時、発表の時・・・）
- ・こんな時どうする？
- ・第三者の悩みごと、困りごと相談として
- ・語るための教材（ゲーム、絵本、物語、クイズ、言語関係図、吃音冰山、どもりカルタ、キャラクター、ジョハリの窓、自分探し、マイすごろく・・・）

9. 仲間と出会うことの意味

- ・どもるのは自分一人ではないことを知る
- ・仲間の存在を知る
- ・自分は大丈夫と思える

- ・仲間と自分のことばで語れる
- ・語り合うことのよさを知る
- ・悩みは人それぞれであることを知る
- ・吃音について語る、学ぶきっかけになる
- ・人によって様々な対処法があることを知る
- ・他者の吃音との向き合い方に触れ、自分なりの吃音との向き合い方を考えることができる
- ・体験談を聞けたり、相互に相談できたりする
- ・モデルとなる人に出会える

10. 当事者のことばから学ぶ

- ・吃音は自分に与えられた良質のテーマ
- ・吃音は自分の全てではないが、大切な一部分である
- ・吃音は日々取り組まざるを得ない問題で、他の問題の対処の仕方も学べた
- ・弱いと思っていた部分が、自分らしさを磨いてくれている
- ・吃音があったから人の気持ちに気づけた

11. おわりに

- ・子どもが吃音があることによる自分自身への縛り（制限）から解放され、自分の世界を拡げていく自由を手に入れるために・・・
- ・自分を生きる
- ・生き方研究所
- ・ことばは ころを 超えない
- ・そばにいてくれるだけでいい

【文献】

- ・国立特別支援教育総合研究所（2007）吃音のある子どもの自己肯定感を支えるために．特教研B-213．（研究代表：牧野泰美）
- ・国立特別支援教育総合研究所（2012）言語障害のある子どもの通常の学級における障害特性に応じた指導・支援の内容・方法に関する研究－通常の学級と通級指導教室の連携を通して－．特教研B-274．（研究代表：牧野泰美）
- ・国立特別支援教育総合研究所（2015）「ことばの教室」ことはじめ．特教研D-333．
- ・国立特別支援教育総合研究所（2017）平成28年度全国難聴・言語障害学級及び通級指導教室実態調査．特教研B-312．
- ・牧野泰美（2004）関係論的視座からのコミュニケーション障害研究の動向．特殊教育学研究，42巻1号．
- ・牧野泰美（2006）言語に障害のある子どもの教育と自己肯定感への支援．発達，106号，ミネルヴァ書房．
- ・牧野泰美（監修）阿部厚仁（編）（2007）言語障害のおともだち．ミネルヴァ書房．
- ・牧野泰美（編著）（2011）吃音を知る・学ぶ、自分を知る・学ぶための手がかり－吃音、そして自分自身と向き合うために－．特教研F-154．
- ・牧野泰美（2015）言語障害教育．柘植雅義・木船憲幸（編著）特別支援教育総論．放送大学教育振興会．
- ・牧野泰美（2017）難言教育における子どもとの関わりと教室経営の基礎基本．日本言語障害児教育

- 研究会（編著）基礎からわかる言語障害児教育．学苑社．
- ・ 牧野泰美（2017）言語障害の特徴と支援．指導と評価，63巻12号．
 - ・ 牧野泰美（2019）子どもと教師の関係づくり、子どもと教師のコミュニケーションを支える視点．特別支援教育研究，740号，東洋館出版．
 - ・ 牧野泰美（2019）子どもの育ちを支えるうえで大切にしたい視点－自己肯定感を支える教育－．特別支援教育研究，741号，東洋館出版．
 - ・ 牧野泰美（2021）レジリエンスと関係論．スタタリング・ナウ，24号．
 - ・ 牧野泰美（2021）子どもの「暮らし」、「生きるかたち」を支える難聴・言語障害教育．きこえとことば，39号．
 - ・ 牧野泰美（2021）吃音のある子どもへの指導・支援を考える－教育（教師）に求められること－．きこえとことば，39号．
 - ・ 牧野泰美（2021）ことばとコミュニケーションにかかわる障害．特別支援教育の実践情報，203号，明治図書．
 - ・ 渡邊美穂・牧野泰美（2012）自分と向き合う子どもの育成－ことばの教室における吃音のある子どもとの学習を通して－．特総研ジャーナル，創刊号．
-

牧野泰美 国立特別支援教育総合研究所 上席総括研究員
（兼）研究企画部長（兼）西日本ブランチ広島オフィス長
239-8585 神奈川県横須賀市野比5-1-1
国立特別支援教育総合研究所
Tel. 046-839-6844（牧野直通） E-mail: makino@nise.go.jp